

いにしえの風を呼ぶ

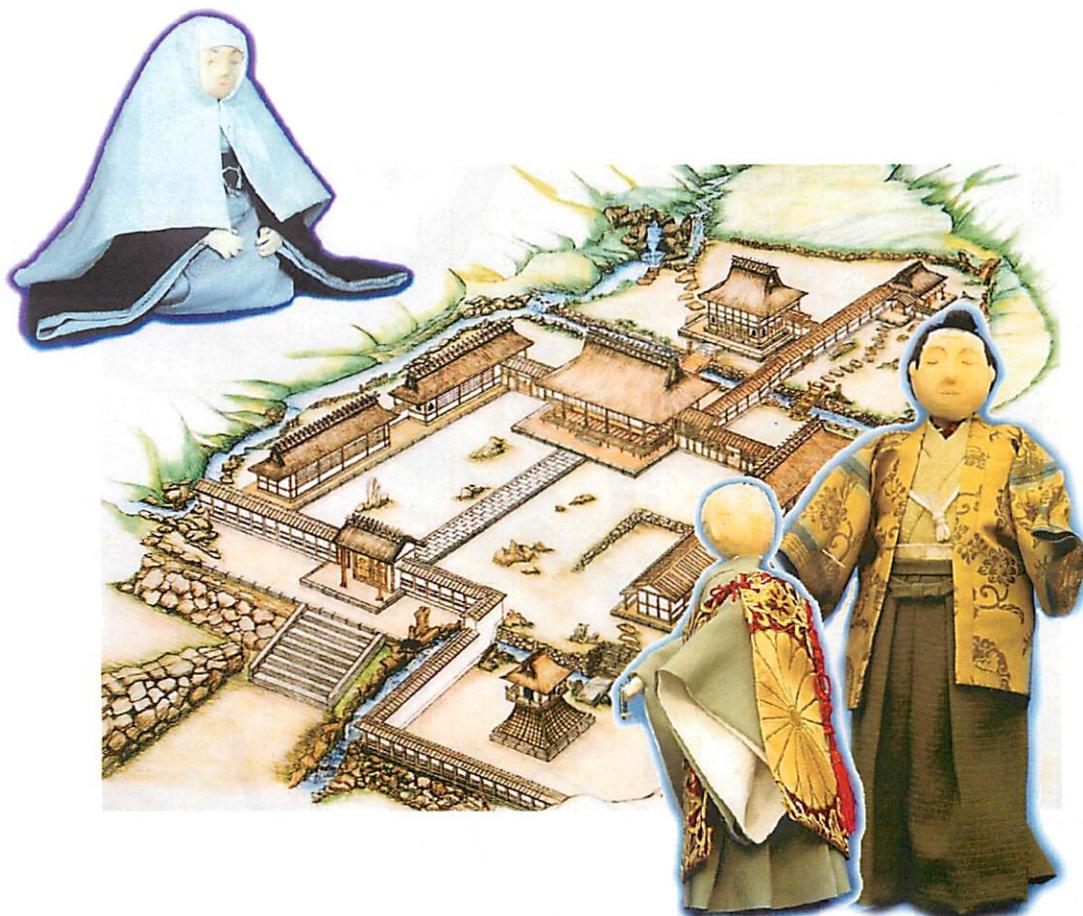
弘祥寺物語



いにしえの風を呼ぶ 弘祥寺物語

目 次

幻の寺院を訪ねて	1
鎌倉時代	1
室町時代	2
弘祥寺の室町時代における隆盛	7
朝倉家の滅亡	10
主を失った弘祥寺	11
江戸時代	13
明治時代の弘祥寺	17
心のふるさと	21
朝倉氏略系図	22
新田義貞・足利氏の略系図	22
斯波高経系図	23
龟山天皇系図	23
五山官寺制度による日本禪宗の流派系譜	24
中国曹洞宗略系譜	25
語句・単語の説明	26
大治山弘祥護国禪寺関連年表	29



東安居ふるさとマップ



幻の寺院を訪ねて

東安居地区から西安居に通じる旧道を行くと金屋町の裏山にある谷間の奥に古い墓石がある。笏谷石に彫られた長光院の墓石である。この墓がこの地にあつたとされる弘祥寺と、深い関わりがあると聞き、何時、どういった形で建立されその後の栄枯盛衰はどう移り変わつて行つたのか、そしてその時代の世相はどういったものであつたのか紐解いて見たいと思う。

鎌倉時代

時は弘安元年（一二七八年）東安居の下市町、金屋町一帯は安_あ居_こ郷_の^{いのう}と称して鎌倉時代の末期には亀山天皇の愛妾であった讃岐局_{さぬきわづほね}が当地_{ちぎよう}を地行_{ちぎよう}していたといいます。又、安居御厨_{あごのみくりや}という伊勢神宮の領地があつたとされている。亀山天皇とは京都の寺院の中で最も格式が高い、五山と言われる五寺院の中でも上の位になる南禅寺を建立した実績を持つ天皇である。古くから非常に関心の高かつたこの安居の地に、亀山天皇の¹勅願_{ちょくがん}により「弘祥護国禪寺」の寺号を戴き建立されたのが始まりである。またこの時のご本尊は、この時代に活躍した仏



与須奈神社境内の片隅にある石祠は、亀山天皇の祠であると伝えられている。



下市町にある与須奈神社のお御堂。このお御堂の後ろに神殿がある。

如来とされている。春日が彫った仏像にはこの他に吉崎御坊にある嫁脅しの面や、鎌倉にある長谷寺の観音像等で、弘祥寺の薬師如来は非常に価値の高いものであつた。弘祥護国禪寺の仏殿をはじめ諸堂の大さや配置は資料も無く、想像するしかないが、この地に建立されたことは確かである。現在の下市町にある与須奈神社境内に亀山天皇の石祠が残つている所以もある。

弘祥寺建立から五十八

年後、時代は鎌倉末期から室町へと流れて行くのである。

室町時代

所謂、南北朝騒乱の時代に突入し、武将達が合戦に明け暮れる世相となつた。延元^{えんげん}二年（一二三三七年）、後に弘祥寺に深く関わつてくる朝倉広景が但馬国^{たじまのくに}（現在の兵庫県の北部）から越前に入り、同時に新田義貞（南朝方）も敦賀の金ヶ崎城に入つた。一方、福井である足羽一帯は斯波高経（北朝方）が支配していた。足羽を背景にして新田義貞軍は斯波高経軍を相手に再三にわたり攻め立て、一度は攻略したが最後には敗退してしまつた。³⁰足羽七城の一つであつた安居城も最初は戦いの臨時的な拠点であつたが、これら武将達の戦いの中から築城されて行き、後には居城することとなつて行く。

暦応元年、当時交通の要所でもあつた日野川と足羽川が合流し、弘祥寺があり、川を挟んで大渡、小渡の村があり、そして安居城が睨^{にら}みをきかすこの場所で、安居渡しの戦があつた。この時の様子を描いたと思われる絵馬が下市町にある与須奈神社のお御堂^{みどり}にかけられている。そして合戦を記録している太平記によると・・・・・船田長門守政經^{ふなだながとのぶまさつね}（新田義貞軍）七百余騎にて安居の渡しより押



与須奈神社のお御堂の中に、安居渡しの戦の様子と思われる絵馬が壁に掛けられている。正徳4年（1714年）の物である。

して足羽に点在する城を背景に幾度となく戦いが繰り返された。暦応元年、この年の七月一日新田軍は藤島の戦いで戦況が思わしくなかつたので、義貞は敵をあなどつて少數を従えて加勢に駆けつけたところ、斯波高経軍の弓攻撃にあい負傷して、三七歳で自害してしまつた。

この時すでに弘祥寺が存在していて、龜山天皇の弘祥寺建立から六十年が経過している。この年に兵火によりご本尊のみを残し諸堂

寄せて半数の兵が川

（日野川）を渡る時、細川出羽守（斯波

たかね）でわのかみ

高経軍）二百余騎に

て対岸に迎え撃ち高

岸の上で防いで、

散々に射させたので

船田勢はみなぎる波

におぼれて、馬・人

多く討たれにければ

が焼失してしまったとあるから、新田義貞軍と斯波高経軍との戦いの中の出来事であると思われる。残念な事にこの弘祥寺は官寺かんじであり鎮護国家、天皇の²安穩あんのんを祈願する寺院であつた為、消防にあたつて庶民の協力がどれだけ得られたか大きな河川はあるものの消防水利としては不便な距離でもあり消火は成すすべもなかつたのであろう。

あるいは合戦の最中でもあつた為、何者かの放火により諸堂からほぼ同時に炎上したので、本尊をお守りする事が精いっぱいではなかつたかと推定する。この時代の寺院は合戦の絶えない武将の守護寺的存在であつたとか、それだけにこの寺の焼失は安居地域にとつては大きな落胆であつたに違ひない。

南北朝の騒乱も新田義貞の死後終息に向かい、越前の南に斯波高経、越前の北に朝倉広景と支配が変わり越前一帯は一応平穏な世相に移りつつあつた。朝倉一族はこの後も次第に越前統一に向けて勢力を強めていった。

康永元年（一二三三八年）この時、黒丸城主であつた朝倉³正景（＝高景）は交通の要所である安居渡しにある弘祥寺焼け跡にいち早く大治山弘祥護国禪寺を建立し氏寺とした。曹洞宗宏智派の別源円旨を



金屋町裏山の谷間にあり、今は杉林と田畠になつている弘祥寺跡地



弘祥寺入口にある大きなどんぐりの木と、柿の木は往時を思い出させるものであります。

開山僧とし、ご本尊は別源円旨の守護仏である薬師如来とされてい

る。

別源和尚は永仁^{えいにん}二年

（一二九四年）に生まれ、

七歳の時父に連れられ

國府（現在の武生）の帆

山寺に参詣さんけいしそこの観

音像を見て出家の志を

起こしたと言います。そ

の後曹洞宗宏智派の東

明慧日和尚のもとで十

二年間執侍しつじし、語学はも

とより中国的な教養を

身につけた。更に元応^{げんおう}二

年（一二三〇年）別源

は商船に乗って中

景が九十八歳で死去後も高景（＝正景）は弘祥寺の造営事業を完成さ

る。

文和元年（一二五二年）二月二十九日朝倉広

日本

太平洋



↑別源円旨は中国に渡り、南京市、杭州市、寧波市（にんぽうし）で中国
曹洞宗の各三人の禅師のもとで修行をした。

国江南の地に渡り

（江蘇省南京市）保

寧寺の古林清茂禪

師、（浙江省寧波市）

天童寺の雲外雲岫

天童寺の雲外雲岫

禪師、（浙江省杭州

市）天目山の中峰

明本禪師などの教

えを受け十一年修

行し、元徳二年（一

三三〇年）日本にかえりました。その後朝倉正景の招きにより出身地の越前に帰り弘祥寺の開山僧として迎えられた。朝倉正景は弘祥寺創建の翌年（康永二年）にいくつかの荘園の田畠や山林を寄進し、更に觀応二年（一三五一年）にも所領を寄進している。弘祥寺の造営は広景一代では完成せず広景はそれを子供たちに託した。しかし長男の能登守はこれを拒み、二男の正景は承諾した為、広景は家督を正景に

と書き、高景は「弘祥寺榮えば朝倉榮ふべし」と書いてこれを互いに交換して永く伝えたと云われている。

別源円旨は貞治三年（一三六四年）六月將軍足利義詮から京都五山である建仁寺の4住持となることを命ぜられ、足の病により一旦は

これを辞退したが、
斯波高経や六角氏頼といった幕府

の要人の勧めによ

り上京し建仁寺の寺内に洞春庵を創建し九月九日5上堂した。



建仁寺の山門「望闕樓」（ぼうけつろう）京都五山の第三位東山と号する臨濟宗建仁寺派の大本山である。開基は源頼家である。

しかし間もなく別

源円旨の病は悪化し十月八日建仁寺四十四世として死去したのである。この間、足利義詮^{あしかがよしから}は使者を遣わして病を見舞わせ十月一日には越前^{えちぜん}の弘祥寺を⁶諸山^{しょさん}に認定して別源円旨の偉業を尊びました。そして義詮公^{よしあさみ}は弘祥寺に仏具を寄進すると、合わせて越前守護である朝倉家からも仏具を寄進した。

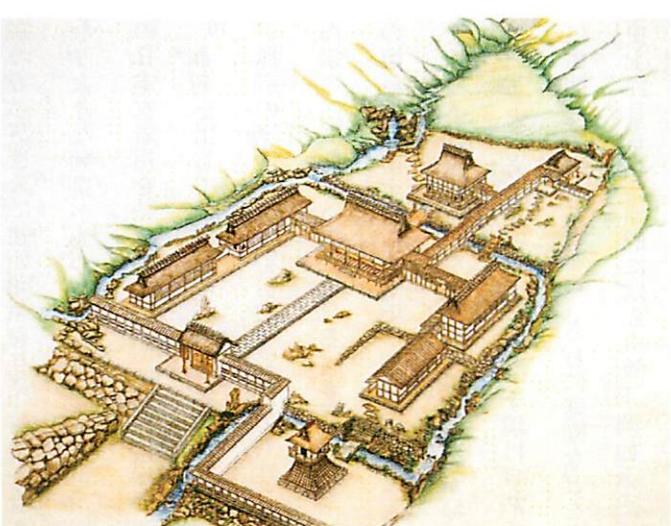


学問僧が研鑽したと言われる京都五山の
建仁寺法堂

別源円旨が建立した塔頭寺院^{たつちやう}洞春庵^{どうしゅんあん}の大檀^{だん}那^なは二条家で、小檀^{だん}那^なは朝倉家であり、寺中^{じちゆう}(建仁寺)の東側にある栄^{えい}西^{さい}禪師^{たつちゅう}の塔頭^{とうとう}の隣にあった。その後建仁寺洞春庵はわが国の曹洞宗^{わんしは}宏智派^{こうちは}のセンター的な存在となり、弘祥寺や朝倉家と強いつながりを持つようになった。

高景の子氏景^{うじかげ}は応永八年(一四〇一年)弘祥寺の仏殿を建立し、その子の貞景^{さだかげ}の代の応永十九年(一四一二年)十一月二十五日に弘祥寺

は⁸十刹^{じっさつ}に認定され越前で最も格式の高い官寺となつた。貞景の子教景^{かき}嘉吉^{かき}一年(一四四二年)に仏殿を再建している。このように朝倉氏が越前に入国して以来ずっと朝倉氏によつて整備が続けられた越前で最も有力な禅宗寺院であった。



朝倉時代の大治山弘祥護国禅寺の七堂伽藍を描いた想像図

佐々木 敬藏 画

ルをいくつかの段に仕切つて寺地を造成してあり、当時の境内や弘祥寺の近景には景勝が多くつた

とされている。その景勝には「頭陀峰、連雲岩、甘露水、深龍淵、新豊亭、逢梁橋、万桑里、三曲洲、精進渓、安居渡」の十景が定められていた。



禅宗の窓は「花頭」と云われる唐様式の障子が特徴である。

ここで禅寺の建物につ

いて少し触れてみよう。建

築史の上では禅宗様と唐

様とか称され、それまでの

和風建築と異なり、アーチ

型の曲線をもつ「花頭」と

呼ばれる窓など数多くの

特徴がある。諸堂の配置は

法堂、仏殿、山門を一直線に並べ仏殿の左右に庫裏と禅堂、山門の両側に浴室、⁹西淨と僧堂などである。弘祥寺の場合、朝倉氏景の代

で仏殿を建立していることから応永八年（一四〇一年）に七堂伽藍が

完成されていると思われる。即ち正景が最初に弘祥寺の建立を手がけてから五十八年間で法堂、仏殿、庫裏、僧堂、禅堂、浴室西淨、鐘樓堂

などの七堂伽藍が完成することになる。

禅宗のもう一つの特徴である衣・食・住の様子を紹介してみよう。

禅宗の法衣が世人に強い印象を与える、禅宗を世人に周知せしめる上でかなり大きな効果があった。禅宗の法衣については、北条貞時が禅

僧の日本衣着用を禁止して、禅僧には禅宗様の法衣着用を厳守せしめる¹⁰制符を出していて、法衣にも注意をはらっていたことを知る。また、禅宗の衣は日本法衣史上においても注目されるものである。

禅宗の住に関する点は禅寺の立地である。禅寺は山麓の傾斜地で山を背にする地が理想の寺院とされる。風景を重視し自然を取り入れて、それとの調和をはかるのが禅宗の特色で、禅宗寺院

では十境ということが言われる。十境は自然の山や岩石・渓谷・そ

れに楼閣・亭橋などの建物、さらに庭園などをもつて選定される。庭園史上注目される禅僧には五山僧玉岡如金¹¹がいた。如金は別源円旨の法嗣（法統を受継ぐ人）で建物と庭園を一体とする禅的景観の形

成とその発展に貢献した。玉岡如金は貞治五、六年頃弘祥寺に住持している。弘祥寺の十境完成に尽力したのかも知れない。

食に関して考えてみると、禅の心が拡大した室町期には、日本人の二度食が三度食となる基礎をつくりあげるなど、日本の食生活にも大

きな変化をもたらしている。更に食物やその調理法が武士の間や一般社会に浸透している。いわゆる精進料理の普及である。汁物・煮物・羹・饅頭などが精進料理の品目であり、食物の多様化を見ることがある。料理法としては、菜種・大豆・胡麻・榧・椿などから製造される植物油を使った揚げ物が使われるようになつた。この料理法が基礎となつて和食の完成をみることになったといわれる。



弘祥寺側から福井市葬祭場を眺めた景色。左側の三角山が鎌嶋山。右側小さな三角山辺りが葬祭場。前を流れる川は日野川。

さて話を弘祥寺に戻してみよう。これら弘祥寺を中心にして 12 宝応寺（一乗谷）・善応寺（今立）などの禪寺は合戦武将の拠所としてその存在感を大きなものにしていった。こういった中、貞治五年（一二六六年）斯波高経が中央（幕府内）で失脚すると、越前に再び逃げ帰り再起を試みた。貞治六年二月斯波高経に味方する在地勢力の千秋安居一門が白土城を築き弘祥寺を攻撃しようとした。白土城とは鎌嶋山城と

も呼ばれ丹生山地（清水町との境界）と接する福井平野の西端にあたり、日野川とその支流の志津川、末更毛川に挟まれている。東西と北を川に囲まれ、周囲に深田が広がるこの城は、山は低いが急斜面であったかも独立峰のようにそびえ、眼下には日野川・足羽川があり、福井平野西部を一望にするところである。付近には少し下流に安居城・弘祥寺があり直線距離にすれば、さほど離れていない。（現在の清水町清水と福井市安田町の間にある低い三角山）白土城の城主千秋安居一門が、朝倉家の氏寺であり、高景・氏景が造営を続けてきた弘祥寺を攻撃することで、朝倉氏に打撃を与えるようした。そこで朝倉氏景は白土城を急襲し千秋安居一門を討ち取った。この戦いの時、千秋安居氏の臣の牧野修理亮が氏景を見つけ、内兜に鎧を突き入れたところ氏景はそれを歯で噛み止めたという。大変な激戦であつたらしいが、氏景は白土城を落し黒丸城に帰陣した。その後斯波高経は落野寺城（冬野町・南居町）から出兵して黒丸城を包囲したが高景・氏景父子は協力して敵を退けた。

弘祥寺の室町時代における隆盛

弘祥寺を取り巻く時代背景も次第に平穏を取り戻し、弘祥寺の隆盛

もこの時期から朝倉家とともに頂点に向かうのである。弘祥寺は朝倉

家の厚い保護をうけながら次第に禅寺として越前の拠点となり京都

13 五山の名僧、高僧が次々に弘祥寺に住持した。また弘祥寺から京都

五山に入寺し、名僧となつた僧達も多く見られ、朝倉家と深く関わり

あいながら、京都禅寺の反映とともに越前で禅の時代を築きつつあつた。弘祥寺に住持した僧は朝倉氏滅亡までの間、実に二十人余りの高僧が活躍したのである。

室町幕府は貞治七年「諸山入院禁制」を初め「禅院法則条々」「五山十刹以下住持職事」など官寺に対する規制をだし、ここで厳しくいいうのが住持職に関する事項である。即ち五山・十刹は二年とし、諸山は三年としている。住持職任命の公文が下りたあと数ヶ月経過しても赴任しない場合は、公文を取り上げるなどの規制を出して、その厳守を命じた。ここで当時弘祥寺に住持した僧達の実録をひもといてみる。

別源円旨は弘祥寺の開山後、しばらく肥後の寿勝寺に住持しその後（一四五八年）京都真如寺（京都十刹のひとつ）の開山を行つた。そして再び弘祥寺に住持していた。別源の後には朝倉家の親族である



相国寺の法堂、わが国最古の法堂が聳（そび）えていた大本山。この大寺に弘祥寺の僧達が入寺するといつた。

紫岩如琳が住持、別源の法嗣である玉岡如金、永享八年（一四三六年）に聖貞首座、同十年契成大韶が住持、また藍青岩や長禄二年（一四五八年）に京都相国寺に入寺した心浩西堂が弘祥寺に住持していた。相国寺は建仁寺と同様に京都五山に列せられた格式の高い禅寺であった。寛正二年（一四六一年）以降になると京都五山僧が次々と弘祥寺に住持するようになつた。この相国寺は足利尊氏が建立した天竜寺に対して孫の義満（二十四歳の時）がその勢力をほしいままに建立し、足利義持が¹⁴護持していた。一国の禅僧の住職任免の一切を司る幕府の出先機関といえるような立場にも立ち、他派住職の進退をも支配したこともある寺院であつた。

寛正二年に鷹瑞が弘祥寺に住持、延徳元年（一四八九年）住職の契壇西堂が京都相国寺に入寺するまで弘祥寺に住持した。明応二年（一四九三年）春岳契東、同六年に珍慶藏主が住持、文龜

三年（一五〇三年）十二月二十八日叔華西雲が朝倉家法要 大功（初代氏景）の百回忌に¹⁵ 拙香を行つてゐる。永正六年（一五〇九年）六月朝倉貞景の命で月舟寿桂が弘祥寺にわづか一、二年ではあるが住持している。月舟は弘祥寺の住職を離れた後も、幾度となく朝倉家の法要など、求めに応じて越前を訪れている。足利氏を始めとする上流武家はもちろん守護など有力地方武士などの、¹⁶ 墓越外護者側が自分の

仏事法要や祈祷などを、五山派僧の手で行わしめていることから、その名僧化を志向するのは当然であり、多額の出費もいとわなかつたのであろう。永正八年八月に功甫洞丹が弘祥寺に入寺し、永正十年（一五一三年）に朝倉家は弘祥寺の住職であつた洞頭和尚を請じて導師とし、英林（初代孝景）の三十三年忌を行い、月舟寿桂を招き陞座を行わせた。弘祥寺に直接関係はないが、朝倉孝景（四代）は小春（二代氏景）の三十三年忌を含藏寺の堂上和尚を請じて導師とし、ここでも月舟寿桂を招き陞座を行わせている。更に永正十六年（一五一九年）朝倉氏一族である宝玉（惠宝）が弘祥寺に住持する。享禄五年（一五三二年）には洞仙雲巣が住持した。その翌年月舟寿桂が建仁寺二百四十六世として死去している。特に月舟寿桂や驢雪鷹覇は越前朝倉

氏とは親交が深く、幾度となく京都と越前を往来した。驢雪鷹覇は弘祥寺に入寺した年月は定かでないが天文期の初めに入寺したと思われる。そして天文十年（一五四一年）には京都建仁寺に入寺している。

驢雪鷹覇は天文十三年（一五四四年）天沢（三代貞景）の三十三年忌の三年忌、天文二十三年（一五五四年）大岫（だいしゆう）の七年忌の陞座説法を行つてゐる。その後、驢雪鷹覇は天文二十四年（一五五五年）に京都に宝應寺（一乗谷）で、天文十九年（一五五〇年）大岫（四代孝景）

の三年忌、天文二十三年（一五五四年）大岫（だいしゆう）の七年忌の陞座説法を行つてゐる。その後、驢雪鷹覇は天文二十四年（一五五五年）に京都

建仁寺二百七十九世として三月に死去している。

話は前後するが天文二十年（一五五一年）

朝倉義景は弘祥寺の丹東堂和尚の拙香により広景の二百年忌を挙行している。永



↑越前安居の弘祥寺から請來されたと言う釈迦如来と阿南尊者（左）迦葉尊者（右）の三尊。今も京都建仁寺の法堂に祀られ、御本尊とされている。

禄五年（一五六〇年）

ねんこう

には弘祥寺の雪窓東堂が心月（教景）の百回忌に拈香を行つてゐる。

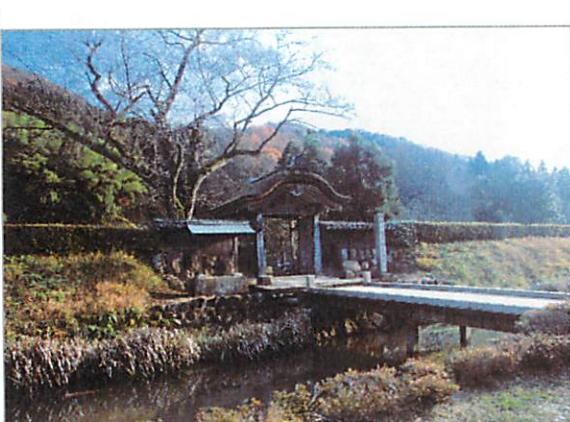
こういった中、室町時代も末期に向かい京都でも騒乱の渦中で、天文二十二年（一五五七）十一月十三日建仁寺が兵火により諸堂が焼失恐らくご本尊も焼失してしまつたのでしよう。この後に建仁寺の塔頭寺院である永源庵（細川家の菩提寺）の玉宝永宗の橋渡しで越前弘祥寺から建仁寺へ釈迦如来坐像と脇侍である阿南尊者、迦葉尊者の立像が請來され現在も建仁寺法堂に祀られている。この時代を知る唯一価値の高い仏像である。これは別源円旨の遺徳であると云われている。

朝倉家の滅亡

この頃になると朝倉家の情勢も風雲急をつげるようになり、一五五五年に加賀一向一揆と和睦はするものの、織田信長軍の近江進出に対し、浅井長政は朝倉方に援軍を要請した。天正元年（一五七三年）七月十七日朝倉義景は自ら総大将となつて一乗谷を出陣、近江北の戦況が朝倉・浅井方にますます不利になる中で、朝倉方では近江北へ出撃するかどうかで軍議が分かれたが、側近の意見を取り入れ、多くの反対を押し切つて八月六日に義景は近江北に出馬した。ところが朝倉方

の前線基地である大嶽山城と丁野城が、十日に信長軍の攻撃によつて陥落した為、柳ヶ瀬に退いて態勢を立て直そうとしたが、朝倉方は戦意を失い完全に浮き足立ち、我先に敦賀に敗走した。信長軍は息もつかず進撃して八月十四日に刀禰坂で朝倉方の敗走軍に追いつき攻め立て、刀禰坂から疋壇までの間で繰り返された壮絶な死闘で、朝倉軍団は完全に敗北してしまつた。

この戦いで精銳のほとんどを失い、朝倉軍団を壊滅させた義景は、近臣に守られてわずかに五六騎を従え十五日の夕刻、一乗谷へ帰陣し、これを最後と覚悟したが、従兄弟



朝倉家 館門

朝倉孝景が黒丸城から一乗谷へ移つて以来100年、義景の敗北により、一乗谷は廃墟となつた。

鏡の勧めに従つて、いつたん大野に逃れた。これに主を失つた一乗

の夕刻、一乗谷へ帰陣し、これを最後と覚悟したが、従兄弟の大野郡司、朝倉景

谷は十八日押寄せた信長の軍勢に放火され、三日三晩焼け続けた。一方大野に退却した義景は頼みとした平泉寺の同心も得られず、その上、景鏡の裏切りによつて、天正元年（一五七三年）八月二十日、ついに大野の六坊賢松寺において自害し四十一歳で滅亡した。

織田信長は一乗谷に前波吉継まへはよしつぐをおいたが、府中城主の富田長秀とみたながひでが一乗谷を攻め、前波吉継を滅ぼしている。天正二年（一五七四年）二月越前国内に一向一揆が蜂起すると一乗谷に入城していた富田長秀も一揆に討たれてしまつた。越前国全体が一揆で吹き荒れると、これらの嵐の中で弘祥寺も本尊を残し、栄えた諸堂が瞬く間に焼失してしまつた。戦国時代の官寺である弘祥寺は戦国武将の栄枯盛衰によつてその影響を避けすることは出来ず、越前に点在する宏智派わんしはの諸寺院は一挙に廃滅するのであつた。

主を失つた弘祥寺

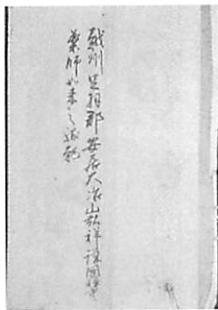
ここでも弘祥寺の歴史的繋がりが一つ途絶えて行つたのである。しかしこの地で弘祥寺が、朝倉氏に守られていたとはいゝ想像できな程の隆盛を見た事は紛れも無い事実であると我々の胸に刻んでおきたい。歴史は非情である。ただ沈黙して眺めているだけである。



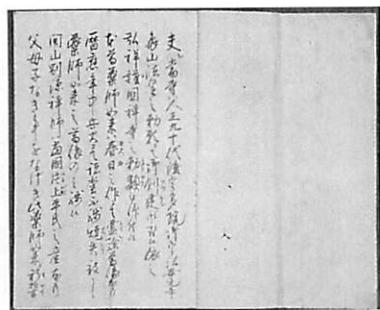
不動石仏が見守る甘露水は地下からこんこんと沸き出でて、瓜を割ったような形をしていたことから瓜割清水とも言われ、大変美味しい水であった。現在は鉄板で囲いがしてある。

者、当寺の薬師如来へ祈念致し、全快を得る人多し。懷妊の婦人当寺の薬師如来へ祈念致し、安産する者多く安産の薬師如来と言われた。

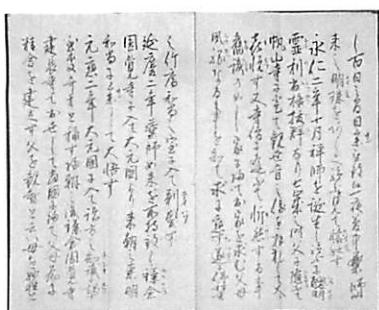
焼失によつて主を失つた寺跡には空しさが残るだけ、せめてご本尊だけでもと命がけで守り、着の身着のまま、かろうじて逃れた僧達や村人達で、雨露を凌ぐだけの草堂に薬師如來を仮安置し、氏神同様に大切にしたと云われる。この薬師如來の事は古人の語り伝えによると弘祥寺の境内に甘露水と申す清水あり。この水を汲み薬師如來にそなえ祈念し、痛む所を洗い、又は薬を煎じて服し恢復した人多し。上につき水を汲みに来る者、年中絶えず。病氣へいき 平癒へいゆのみならず薬師如來を願仰すれば諸願を成就する、と經文に¹⁹ 詳らかなり。重病の



1



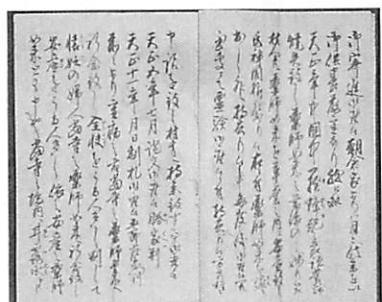
2



3



4

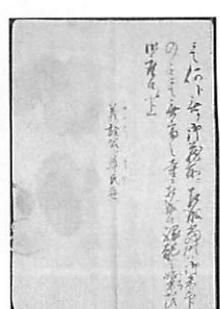


5

「越州足羽郡安居大治山弘祥護國禪寺薬師如來の縁起」古文書
上田家所蔵 (1~7に書かれている)



6



7

これだけ薬師如来が有名になると、草堂に安置されただけの薬師如來を度々盗み出す者が絶えなかつたが、到る所にて 20 靈験があるので恐ろしくなつて、持ち去つた者から色々な申し開きをして、村方に薬師如來を返してきたという伝えがあつた。諸堂が焼失してから三年後の天正五年（一五七七年）これらの話を聞いた越前国主の柴田勝家公より薬師如來 禁制札を賜り、また天正十一年（一五八三年）には当時の越前国主の丹羽長秀公からも禁制札を賜つて、薬師如來が見守られる様になつた。

こういつた中、慶長初年（一五九六年）戸田武藏守勝成が弘祥寺のほぼ隣にあつた安居城に居城していたが、慶長五年（一六〇〇年）戸田氏が関ヶ原の合戦において西軍に属し討ち死に断絶し、安居城はこ

のとき廃城になつてゐる。

江戸時代

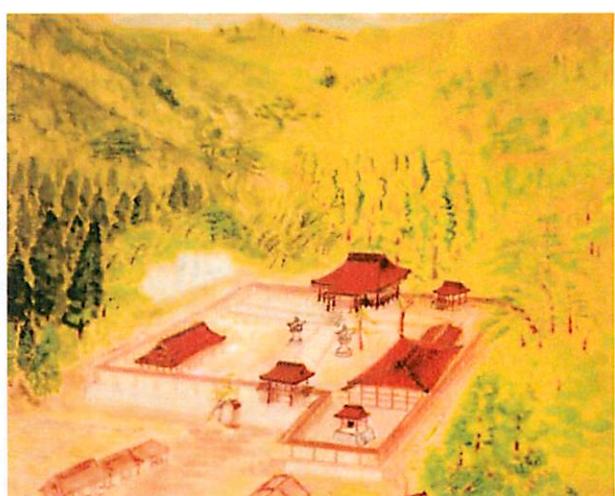
関ヶ原の合戦が慶長五年九月に起き、徳川軍が勝利した翌年江戸時代へと移つていった。徳川家康の二男結城秀康が六十八万石を与えられ越前に着任し、直ちに北の庄城の建設に着手した。十一年を要して完成したが、工事は難航して庶民にとつては大きな負担となつた。

時は移つて、^{まんじ}万治二年（一六五九年）越前四代藩主、松平光道公は万松山大安禪寺を創建し、田ノ谷村や近隣の村々の田畠・山林など計三百石を寄進している。そして寛文四年（一六六四年）光道公の御局

²⁹ 長光院が御心願事があつて草堂（弘祥寺の）へ御祈念したところ、

その靈應速やかなることに御感心し、大変喜ばれて光道公に弘祥寺の再興をお願いした。寛文四年藩主松平光道公は長光院の²²帰依²³により臨済宗妙心寺派の大安寺住職默印和尚を²³兼帶せしめ、弘祥寺を再建した。同時に屋敷分三石を贈つてゐる。

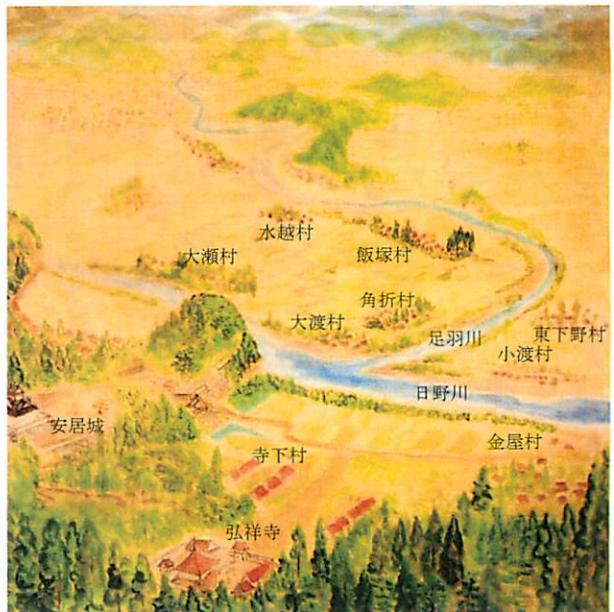
これら再建された弘祥寺の諸堂の配置や大きさ、形はどのようなものであつたのか検証してみよう。寛文四年頃の諸堂の配置を確認できる資料は残念ながら見つけることは出来なかつたが、文政十三年（一



長光院の帰依により建立された弘祥寺の伽藍（想像図）
飯塚町の吉村与吉氏により描かれた

師堂、鐘堂、小屋が存在していた。薬師堂、鐘堂はこの時点では大破し

流れを受継いで、特に弘祥寺を中心に越前において栄えたが、一挙に廃滅する様は目を覆うほどであった。しかしながらほとんどの寺院が廃墟となる中、弘祥寺だけは、薬師如来の靈験の公聴と、長光院の帰依のおかげで存続を見ることができた。しかし朝倉時代の栄華の面影はなく勢いのある寺觀にはならず、長光院の菩提寺的な性格を持つ寺院であり、松平家の願い寺である大安禪寺の黙印和尚の兼帶住持ということもあって、ひつそりとした雰囲気の寺院であったように思われ



弘祥寺の裏山から当時の足羽一帯を眺めた展望図（想像図）
飯塚町の吉村与吉氏によって描かれた

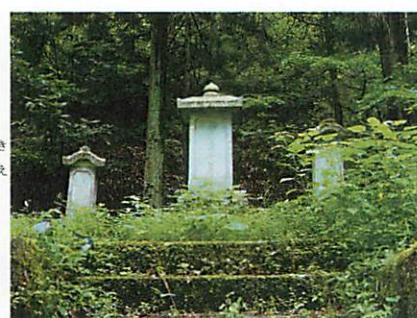
て形を留めないと記している。しかし寛文四年当時はこの六堂が建立配置されていた。その配置については資料を確認できないが、諸堂の平面的な大きさは資料に残っている。本堂（幅四間、長八間）、庫裏

（幅五間、長六間）、小屋（幅二間半、長三間）、鐘樓堂は大破、薬師

堂（幅二間半、長三間）は大破につき薬師如来は本堂に移した。

中世代の弘祥寺が京都五山僧をもとに、越前で一大繁栄を成した。

当時臨済宗五山派中でも唯一の曹洞宗系宏智派であつた別源円旨の



↑長光院の墓石は一段と高い墓地に建立されている。中央が長光院のお墓。



↑長光院の墓石は笏谷石で作られており、縦目
のないりっぽなものである。
法名 長光院殿春庵看花大信女

が優れなかつたせいか、まもなく没し光道公によつて、現在見ることができる長光院の墓が建立された。

る。長光院の帰依により再建された弘祥寺ではあるが、長光院の健康

ができる長光院の墓が建立された。

長光院没後の寛文九年（一六六九年）には福井城下に大火がありその様は当時の弘祥寺から眺めると、北東の空が真っ赤に焼け、風向

きによつては弘祥寺あたりまで煙がたどり着いたのではないでしょ
うか。そしてこの年、弘祥寺は「文明状」により臨済宗妙心寺派に属
し、臨済宗妙心寺末となり、寺地、山林など三石余り与えられた。更
に寛文十三年には光道公より寺領二十石が寄進されるとともに、松平
昌親、綱昌の代でもこの寺領に対して朱印を賜つてゐる。

こういつた中で、松平藩の情勢も刻々と変化し、寛文十一年（一六
七一年）には松平光道公の愛妻である国姫が自害し、延宝二年（一六
七五年）には松平光道公が三十九歳の若さで自害をしてしまつた。^貞
^{きょう}三年（一六八六年）になると、^二代藩主綱昌公の代に、養父子の
骨肉の争いになり、福井藩最大の危機を迎えた。前藩主の昌親は万事
が思いのままにならない為、藩主綱昌を乱心であると幕府に訴えたた
め幕法により所領を奪われた。福井藩の収入は御家騒動の前までは四
十七万五千石であったが、^二二十五万石に減少させられている。

その為藩の財政は困窮し家臣の転職を求め、藩に残つた者には給料を
半分にした。綱昌公が没した後の享保六年（一七二二年）、分家であ

る松岡藩主松平宗昌（五万石）が本家を相続して福井藩は三〇万石に
なつた。

一方、弘祥寺では元禄七年（一六九四年）本尊を釈迦如来に置き換

えて、薬師如来は薬師堂に移した。薬師堂はこの時に建立されている。

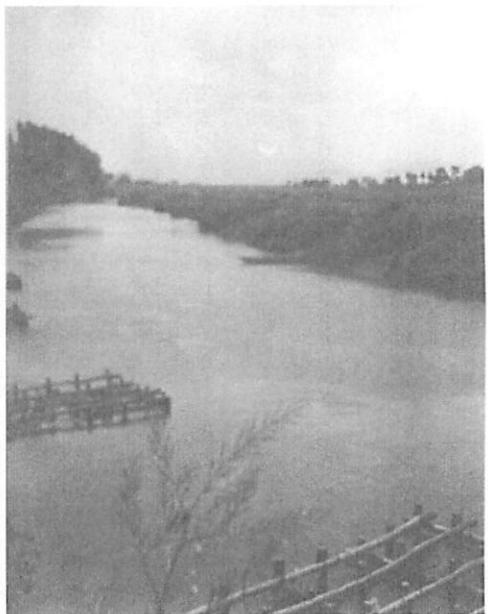
こういつた中先にも述べたとおり、藩の財政も困窮の折、また光道公
が御在位の時とは時世が流れていることもあって、松平家の外護はほ
とんど得られる状況ではなく、除々に弘祥寺の運営もままならぬ状態

に移つて行くのである。そして六十二年後の宝暦五年（一七五六年）

弘祥寺は大安院様御位牌を建立し、これを本堂仏壇に安置奉り、朝暮
勤行^{（こんぎょう）}しております。寺領二十石はあるが御朱印だけで収穫物は一粒
もなし、非情に困窮し、先住の笑翁住職の時の仮庫裏も大破し、その
後の梅嶺住職初任の時、本堂も大破し、庫裏も無し、日常の²⁴栖居^{（せいきよ）}も

難しい状態になり、檀家もなく、自力で修復する」とも出来ない為、
國中に助成をお願いして本堂修復と庫裏建立がようやくできたと六
月四日に役所に報告を行つてゐる。

弘祥寺住職や檀家衆がこの寺院の維持に懸命な努力をしている中、
弘祥寺の運営には関わりの無い藩主は、弘祥寺の目の前にある足羽川



昭和 32 年頃の日野川、金屋河戸（こうど）跡の写真
金屋町から下市と須奈神社方面を眺める。

は鳥類であった。しかし鳥類の繁殖をはかるための措置として住民は生活上種々の制限を受けた。川筋における諸鳥の捕獲を始め、一切の殺傷禁止、鷹の止まり木確保の為の樹木伐採の禁止、住居の制限等種々の制約が規定されていた。住民の生活上の難儀は著しいものがあった。この目の前の対象的な風景を弘祥寺にとつてどのような思いで眺めていたのであろうか。

享和年間（一八〇一年）に

入ると役所から寺について

のお尋ねがあり弘祥寺は「大

治山弘祥寺記」を作り届け出

た。更に文政七年（一八二

五年）眼道住職（三十歳）

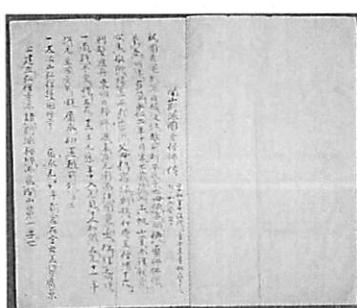
が弘祥寺に住持し、文政十

三年眼道住職及び檀家一同

が、弘祥寺の寺中の状況を

「弘祥寺由来書」に書き役

獵のための禁獵区であるが、鷹狩りのためであるから捕獲禁止の対象



2

「大治山弘祥寺記」(次ページ 3~4 へ続く)

前述の通り福井藩は東安居地区を囲む足羽川・日野川の両河川を御

留川（禁漁区）に設定し、藩主のみが川遊びを楽しんでいたが、その違反者に対しては厳罰をもつて臨んだ。それと並んで御鷹場は藩主遊

獵のための禁獵区であるが、鷹狩りのためであるから捕獲禁止の対象

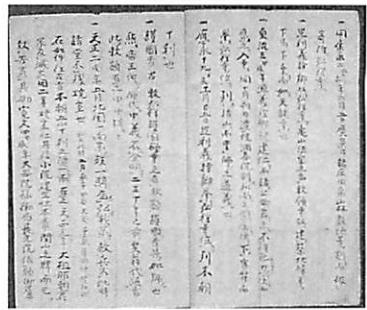
が弘祥寺に住持し、文政十

三年眼道住職及び檀家一同

が、弘祥寺の寺中の状況を

「弘祥寺由来書」に書き役

獵のための禁獵区であるが、鷹狩りのためであるから捕獲禁止の対象



3

「大治山弘祥寺記」は 1 ~ 4 にまとめられ、毛筆で書かれている。
飯塚町 上田家所蔵



4

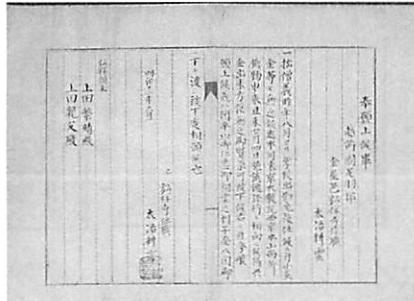
り 「鶯の声」と弘祥寺の春をいきいきと詠み、寺院の寂れた様子も伺える詩である。

明治時代の弘祥寺

山水草木の中の弘祥寺にも明治維新が訪れ明治五年には弘祥寺の緑高を返還したため寺院の維持運営がますます苦しくなり、明治六

弘祥寺が依然として苦しい状況にあることを切実に訴えている。落ちぶれた草堂ではあるが、見方によつては古く寂れたその風景はかえつて人の心を癒すのかも知れない。この頃（一八五〇年）前後に橘曙覽が弘祥寺を訪れ、27 古色蒼然とした仏像と、春の景色を眺め

「すすけたる仏のかほもはなやかに うちみられけり 鶯の声」と弘祥寺の春をいきいきと詠み、寺院の寂れた様子も伺える詩である。



明治 12 年弘祥寺住職 大治耕雲が二度目の金銭寄付願いを上田繁晴に出した「奉願上候事」



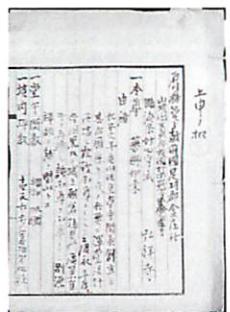
明治 11 年弘祥寺住職 大治耕雲が壇主上田治良吉に寄付金の「願書」を出している。



明治 6 年上田治郎兵衛が本山妙心寺に寺の維持が困難であるが、永続を訴える書状

年（一八七三年）飯塚の上田家より本山妙心寺管長に書を送り、檀家無く寺の維持が困難であることを訴えている。さらに上田家は明治八年に何とかこの寺を維持してもらおうと土地を弘祥寺に寄付している。

明治十一年（一八七八年）から壇主上田治良吉に弘祥寺の山林などがお取り上げになり、この先如何したらよろしいものか心痛である訴え、寺の維持のため寄付金の願い書を出している。折りしもこの年には明治天皇が北



寺院目録 1

寺院目録 2

明治 12 年 10 月
弘祥寺住職を兼帶していた華藏寺住職の立花
毅道が石川県に上申した寺院目録（台帳）

弘祥寺永続の為、上田
家に木水融真が誓約書
を出している

川
目
願
後、十月華藏寺（飯塚）
住職の立花毅道が弘祥
寺住職を兼帶し、「寺院
目録（台帳）」を書き石
川県に上申している。

治十五年（一八八二年）
それから三年後の明

り知るよしも無かつた
であろう。そして翌年明
治十二年六月大治耕雲
は二度目の金銭寄付の
願い書を出し、八月には
心労が過ぎてか死去し
ている。大治耕雲の死去
後、十月華藏寺（飯塚）
住職の立花毅道が弘祥
寺住職を兼帶し、「寺院
目録（台帳）」を書き石
川県に上申している。

陸巡幸をなしているが、
弘祥寺の壊滅的な運営

など当事者以外、誰ひと
と申すが、誰ひとり

2

1



↑ どっしりと聳える妙心寺の山門

木水融真が弘祥寺進退人の
上田家に寺維持の「誓約書」

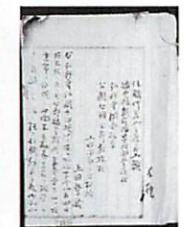
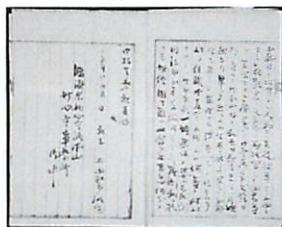
を出し寺永続の準備を進め
たが弘祥寺を廢寺とし、大安

寺に併合するよう妙心寺本
山から指示を受けたため、住
職継目に木水融真を推挙し
たが異議をとなえられ、檀家

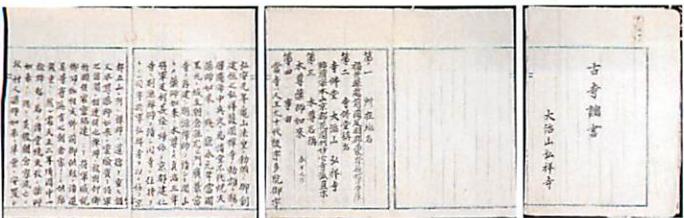
三軒では寺の維持は困難で
ある事を理由にこの地での
寺の維持を諦めざるを得な
くなるのである。

4

3



気がつけば時代は近代へと突っ走り、北陸にも確実に文明開化の波が押し寄せ、北陸線が開通し大土呂駅が開始されて行く。新しい波に打ち消されるかのように、長い間の寺院の歴史も次第に終息に向かって静かに進んで行くのであった。明治二十二年に足羽川の大洪水が発生し各用水、取水口が全部流出してしまったが、弘祥寺の嘆きを天が思いやつた出来事だったのかも知れない。



3

2

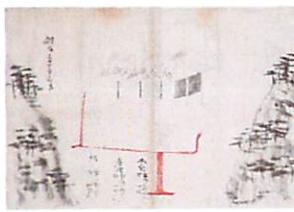
1



5

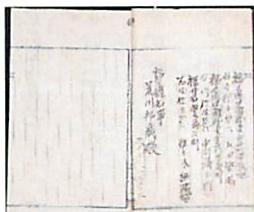


4



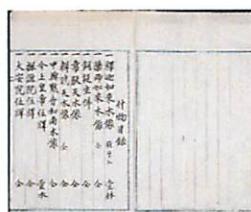
絵図面

↑松山元定和尚によって作られた「古寺調書」 飯塚町 上田家所蔵
(1~6と絵図面)



6

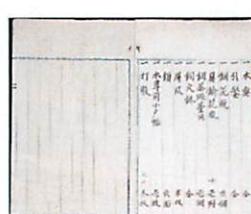
やがて弘祥寺を松平家の菩提寺である大安寺に併合する準備が進められ、大安寺住職の松山元定和尚が明治三十年（一八九七年）「古寺調書」^{じとうもつちょう}を作っているが、その中には春日作厨子入り木像薬師如来像・国主制札・藩主朱印や本堂の絵図面が書き記されている。翌年には弘祥寺の土地など飯塚の上田家が寄付をしていることから、この併合を前に上田家から当時の村長に「寄付地所証明願」^{せいつきぢしよめいねん}が提出され、村長はこれを証明している。



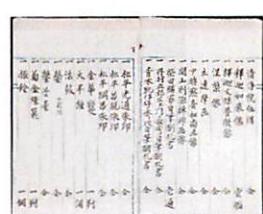
2



1



3



4

↑松山元定が書いた「什物帳」 飯塚町 上田家所蔵
(1~4に書かれている)

おりしも明治四十四年、足羽

川の河川大改修が行われ、渡し

おおたり

舟と共に生きた大渡、小渡の

こわたり

村々は河川敷となってしまう

ので、角折・金屋・福井などへ

移籍し、両村は消滅していった。

そして渡し舟の変わりに二光
橋が架けられ人々の足は確保
されたのである。

いよいよ明治四十五年、大安

寺住職の松山義林が弘祥寺所
蔵の物品を受領した。受領した

物品は文書、掛軸が主であつて
仏像の所在が明らかでないこ

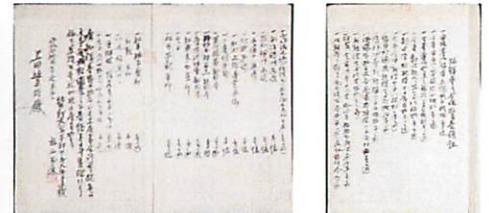
とが誠に残念である。長く続い
た弘祥寺の歴史も、ここ金屋の

地に幻と化し、あとは人々に語



↑上田家が弘祥寺に寄付した地所を村長に証明してもらう為に証明願を出している。
村長の認め印が記されている。(1~3)
飯塚町 上田家所蔵

1



2

↑大安寺住職 松山義林和尚が弘祥寺の物品を受け取った物品受領書 (1~2)
飯塚町 上田家所蔵



↑田ノ谷町にある松平家菩提寺 万松山大安禪寺本堂

り伝えられるのみとなつ
た。大渡、小渡の村々、そ
して弘祥寺と共に栄えた

寺下村も、明治の年号と共に
現実の世界から 風化
していくのである。

心のふるさと

この東安居の地に弘祥寺が跡形もなく消滅したとはいえ、今思えば東安居の無くしてしまった宝石のような気がしてならない。大治山弘祥護国禪寺その昔、越前で禅宗拠点として輝かしい繁栄をなした。弘

長い年月変わることのない渓流のある谷を、ロマンと想像と憩いのある場所、即ち「心のふるさと」に出来るならば素晴らしい成果であると思ひます。

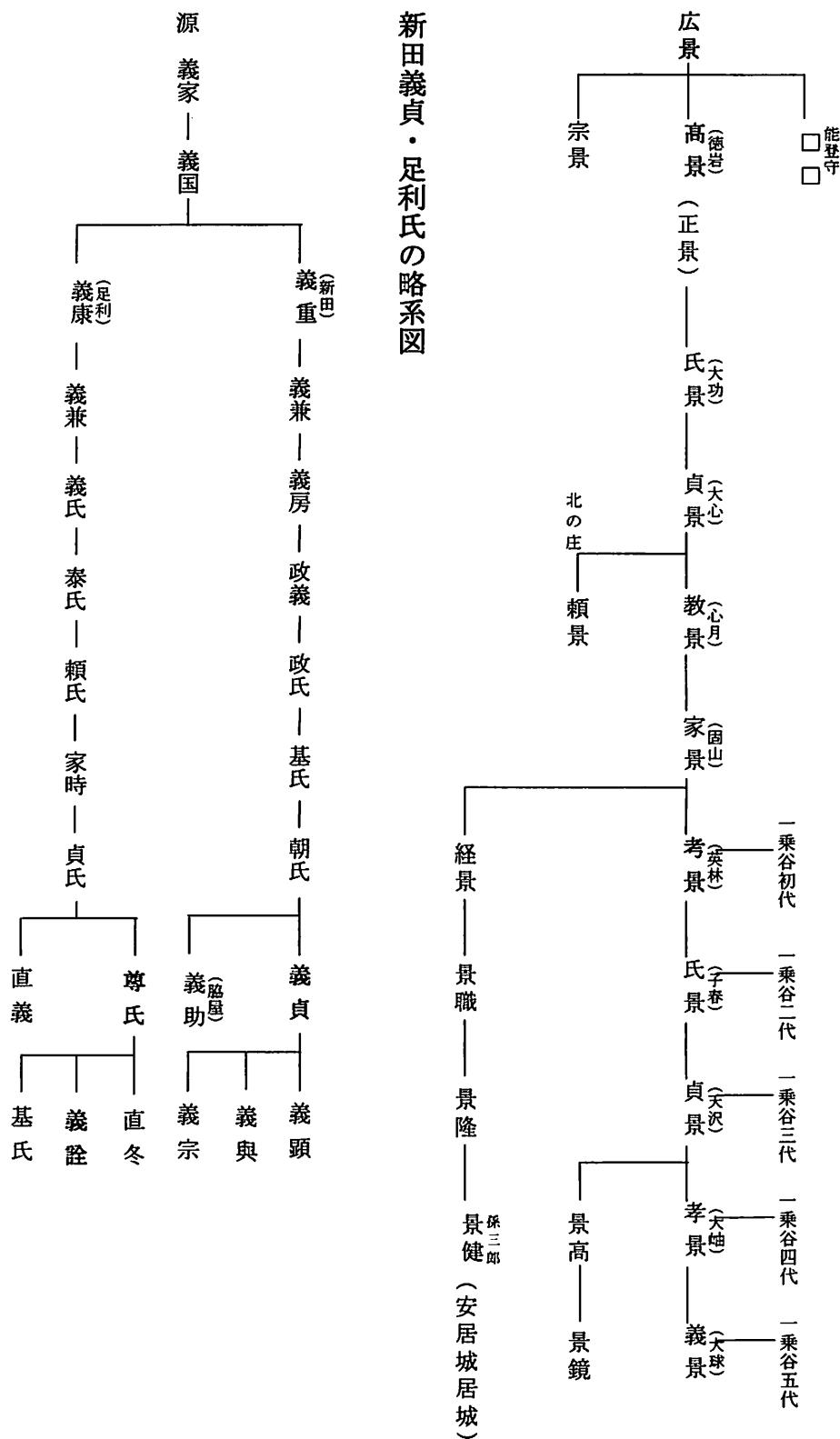


明治の頃、信者によって建てられたと思われる三界萬靈と刻まれた石仏。現在弘祥寺跡地の入口に祀られている。

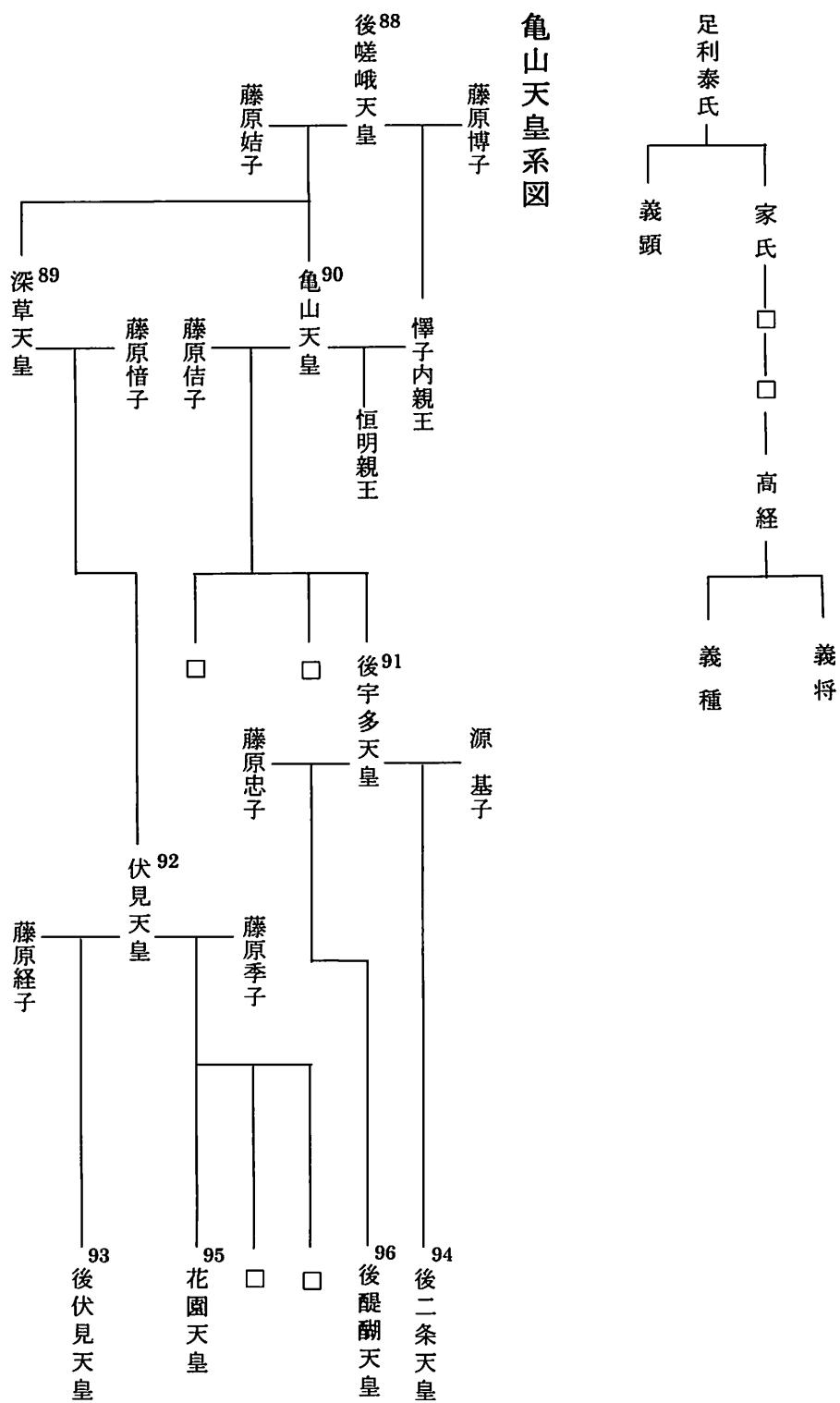
祥寺の七百二十におよぶ長い歴史の中で、中世期の戦国時代に隆盛を誇つた武将朝倉氏の外護を受け長期にわたって最大の隆盛をなした事実は決して変わらない。しかし長光院の弘祥寺が建立された

江戸時代から明治時代にかけての弘祥寺は、長く苦しい状況が続くのであった。檀家衆もあらゆる努力を試みたが、ここでもこの寺が一般庶民まで浸透して行かなかつた事情が大変寂しい結末となつていつたのである。歴史探訪で得た七百年余りの歴史の凄みと面白さは、我々に新たな感動と力を与えてくれた。なぞを解くにはあまりにも資

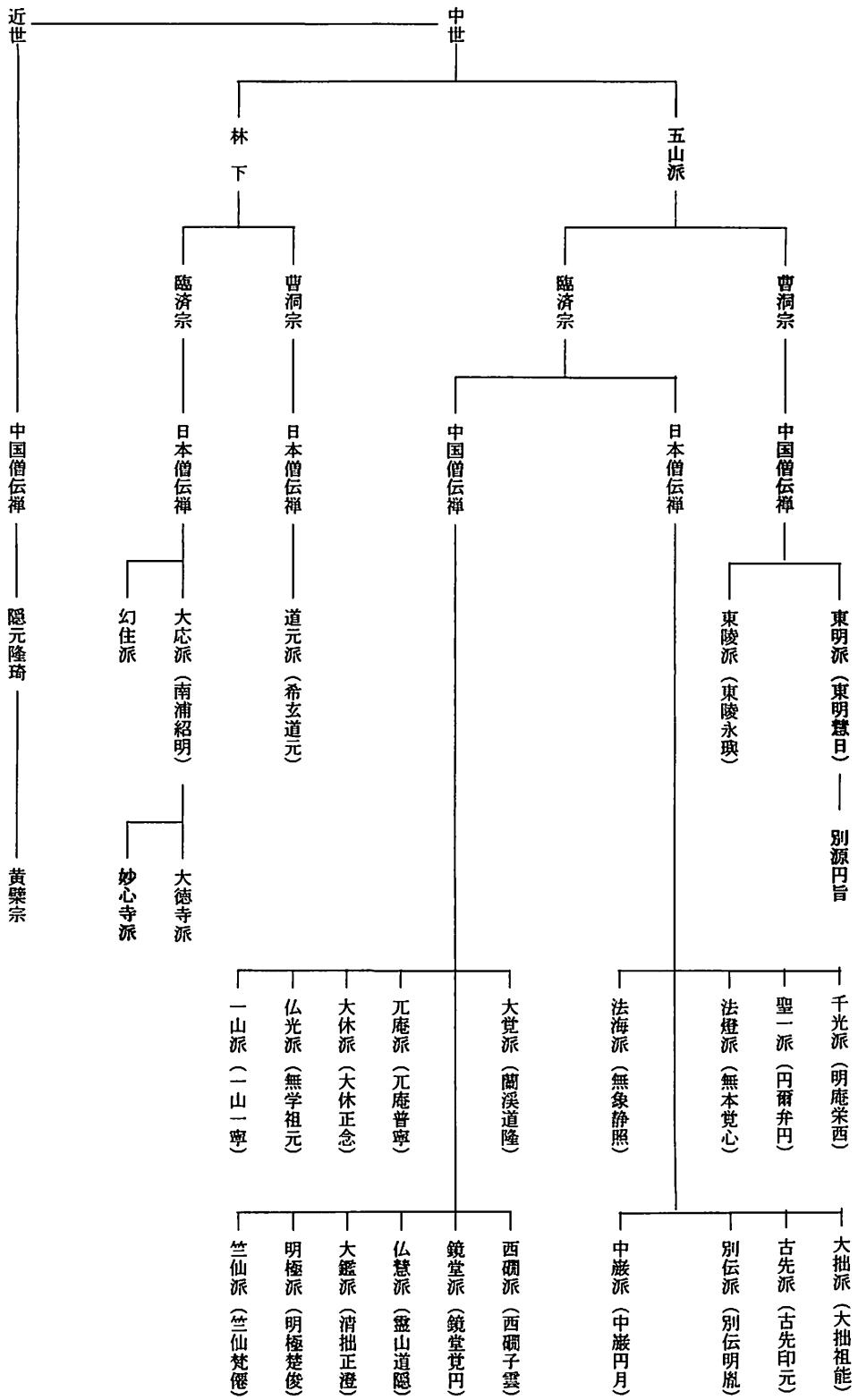
朝倉氏略系図



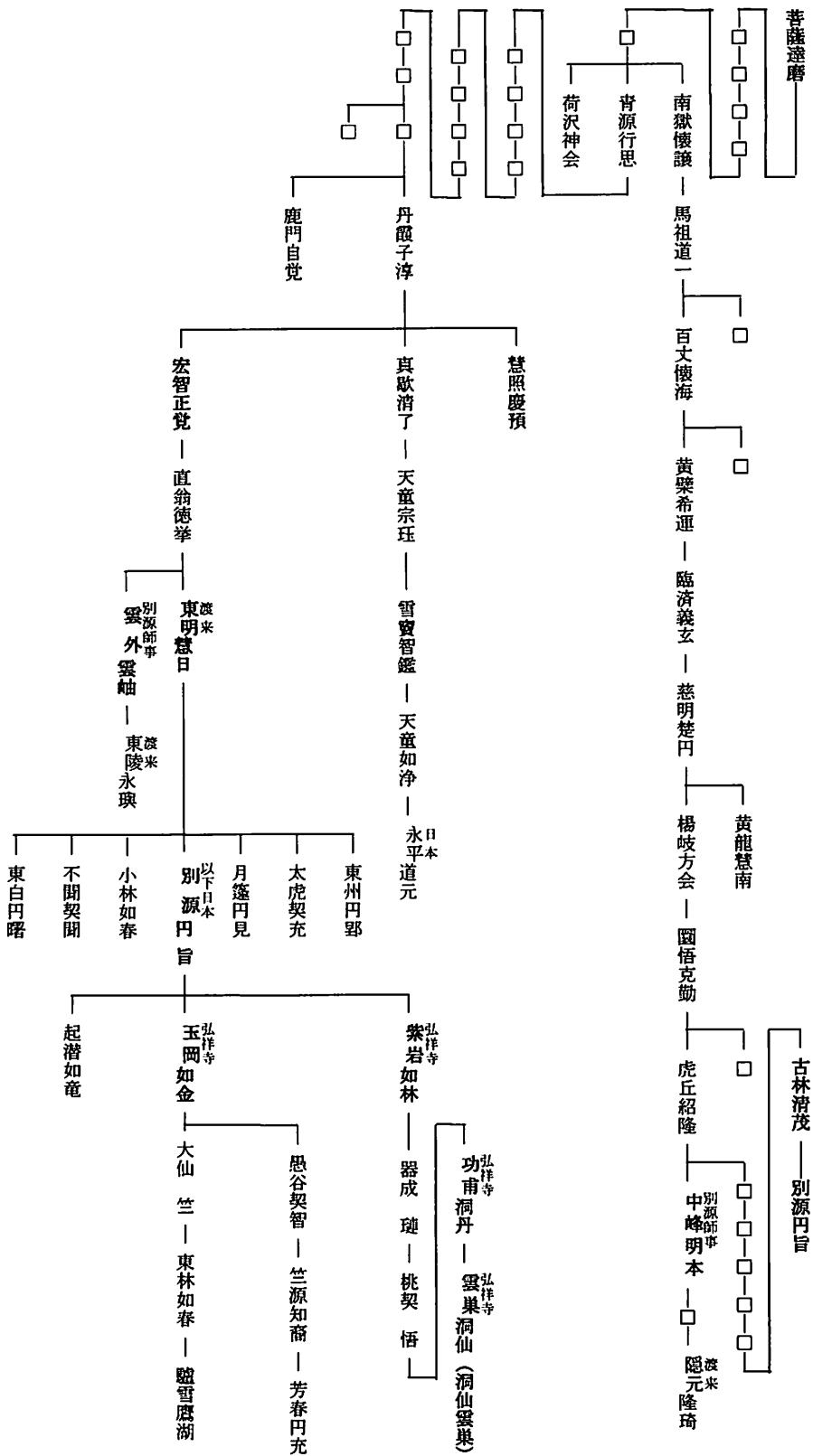
斯波高經系図



五山官寺制度（足利幕府）による日本禅宗の流派系譜



中国曹洞宗略系譜



語句・単語の説明

5	上堂	禪宗で説法の為住持が法堂に上ること。		
6	諸山	十刹の位より、ひとつ下の寺格。		
7	塔頭寺院	寺中（山内の寺院）、脇寺、子院 (じっせつ) 臨済宗で五山に次ぐ寺格の十大寺。中国		
8	十刹	で始まりわが国では一三四二年～八六年に制定。		
3	朝倉正景	弘祥寺の創建者。東安居郷土誌「心のふるさと」によ ると弘祥寺の開基については『東海一溫別集』『五山 文学新集』の中の「洞春菴別源禪師定光塔銘」の中に、 別源円旨が「康永元年、帰越足羽県、朝倉金吾、開 弘祥寺基、為第一世」とあるが、"金吾"とは 官職である彈正左衛門の唐名（中國風の官職）である から広景の子である朝倉彈正左衛門正景（高景）を指 し、また同別集の「朝倉徳岩居士（正景）小祥忌拈香」 にも、弘祥寺を創寺したことを記しているので弘祥寺 開基は正景が正しいらしい。とあることから、ここで は弘祥寺創建は朝倉正景とした。		
4	住持	一寺の主長である僧。仏法をとどめたもつて護持す ること		
13	京都五山	5	上堂	禪宗で説法の為住持が法堂に上ること。
12	宝應寺	十刹の位より、ひとつ下の寺格。 (じっせつ) 臨済宗で五山に次ぐ寺格の十大寺。中国 で始まりわが国では一三四二年～八六年に制定。		
11	法嗣	寺中（山内の寺院）、脇寺、子院 等持寺、臨川寺、真如寺、安國寺、宝幢寺、普門寺、 廣覺寺、妙光寺、大徳寺、竜翔寺、 鎌倉において 禅興寺、瑞泉寺、東勝寺、万寿寺、大慶寺、興勝寺、 東漸寺、万福寺、法泉寺、長樂寺 便所		
10	制符	禁制の事をするした文書又は掲示。制札。 (ほうし) 法統を受継ぐあととり。		
9	西淨	宝應寺は早くから一乗谷に建てられた安居弘祥寺の掛 所的な支院であったと思われる。 至徳三年（一二八六）頃の京都五山格は十一ヶ寺とな		

つていた。

院と言われ、正伝院と永源庵が明治六年（一八七三）

五山の上

南禪寺

〃 第一 天竜寺・建長寺

〃 第二 相国寺・円覚寺

〃 第三 建仁寺・寿福寺

〃 第四 東福寺・淨智寺

〃 第五 万寿寺・淨妙寺

護持
守り保つこと。

拈香
拈香文の略、

香をつまんで焚いた後、禪宗で僧が死者に対して哀悼

の意を表して朗読する文。

施主、檀那

永源庵
永源庵は正平年間（一三四六～七〇）無涯仁浩を開山

として創建された肥後（今の熊本県）細川家の菩提寺。

今も境外墓地には細川頼有父子を始めとする細川家、一族及び当庵に寄寓（他人の家に身を寄せる）していく福島正則らのお墓がある。現在の寺院名は正伝永源

15 14

19 18

詳らか
平癒

くわしいさま。こまやかなさま。
病氣の治る」と

20 19
靈驗

神仏などの通力に現れるふしげな驗しるし

21 20
禁制札

ある行いを禁止する札

22 21
帰依

神仏などすぐれたものに服従し、すがること。

23 22
兼帶

兼任

24 23
栖居

日常生活する場所。

25 24
清遊

風流な遊びをすること。上品な遊び。

26 25
筆致

文字または文章の書きぶり。

27 古色蒼然

ふるびた様子。いかにも古びて見える様。

帳。

神仏などに心中で願いを立てること。

部省も同年に廃止されて内務省社寺局が設置され
てその管轄を受け、文部省所管となるのは大正二年
のことである。

心願

足羽七城
「城跡考」による

小黒丸城・北庄城・江守城・勝虎城・波羅密城・
しうとうじろ
はらみじろ

藤島城・安居城

禄高を返還

明治元年神仏判然令、いわゆる神仏分離の令が出されそれを契機に廃仏希釈（これにともなって、神社と仏寺との間に争いが起り、さらに寺院・仏具・経文などの破壊運動が起つた。）の事態となつて日本

仏教界は大きく揺れ動き混沌とした。廃仏希釈では寺院の破壊など臨済宗寺院もその影響を受け、また

明治四年正月に御朱印じゅいん寺領が政府に没収され、この

上知の実施で経済的打撃を大きく受けた寺院は多かつた。寺院に対する新政府下での所轄は、明治元年社寺裁判所の支配下におかれたが、その後明治三年民部省、どう五年三月には教部省へと移り、その教

大治山弘祥護国禅寺 関連年表

弘祥寺関係		その他の時代背景	
年号	出来事	年号	出来事
鎌倉時代 弘安元年 (1278) 永仁2年 (1294)	龜山法皇の勅願により「弘祥護国禅寺」が建立される 春日作 薬師如来を本尊とする 別源円旨が生まれる	鎌倉時代 建仁2年 (1202) 寛元元年 (1249)	將軍 源頼家の援助で建仁寺建立。開山は栄西禅師 建仁寺造営はまさに鎌倉幕府の一大事業で幕府の威勢を京都に顯示した。 道元 永平寺を開山 安居の郷は鎌倉末期から有り、龜山法皇の愛妾である鎌岐局が当地を知行した。またこの地には安居御厨という伊勢神宮の御厨があつたと伝えられている。
暦応元年 (1338)	兵火によりご本尊を残し、諸堂焼失する。	室町時代 建武元年 (1334) 延元元年 (1336) (1337) 暦応元年 (1338)	建仁寺京都五山の第二位になる。 朝倉広景但馬から越前に入る。 足羽北庄黒丸館に住す。 新田義貞、氣比神社大官司に出迎えられ金ヶ崎城に入る。 安居の渡の戦い 斯波高経勢(細川出羽守)200余騎と新田義貞勢(船田長門守政經)700余騎 斯波勢に軍配あり。 新田義貞戦死(37歳) 7月2日斯波高経勢と戦う。藤島の戦いで負傷し自害。
康永元年 (1342) 康永2年6月 (1344)	黒丸城主朝倉高景(正景)により、弘祥寺を再建する。 臨済宗宏智派の別源円旨禅師を開山とする。 別源円旨禅師の守護仏の薬師如来を本尊とする。 朝倉高景、諸荘の田畠、山林、敷地を弘祥寺に寄進 紫岩如琳(朝倉家の親族)弘祥寺に住持	(1339) (1342) 康永元年3月	斯波高経若狭國守護に就く 南北朝の戦い終息 越前の南に斯波高経、越前の北に朝倉高景 越前南守護斯波高経は崇禪寺(南条郡平次)を斯波家の祈禱所に指定
文和元年以降	朝倉高景が別源円旨と師壇の契約 円旨は自筆で「朝倉栄えば弘祥寺栄うべし」と 高景は自筆で「弘祥寺栄えば朝倉栄うべし」と 書を交換した。	文和元年 (1352) 延文2年 (1357)	朝倉高景2月29日(98歳)死去 朝倉高景が將軍足利尊氏から足羽北庄預所職を宛行されてから、北庄を中心に勢力を延ばす。

弘祥寺関係		その他の時代背景	
年号	出来事	年号	出来事
貞治 3年 (1364)	9月9日将軍 足利義詮（よしあきら）公の帰依により別源禪師を建仁寺住職（44世）とする。 10月1日義詮公により弘祥寺の寺格を「諸山」に列す。 薬師如来の盤敷により義詮公から仏具を寄進される。 越前守護の朝倉家からも仏具を寄進される。 *この時に釈迦如来と脇侍が寄進されたのかも知れない。		
年代不明	10月8日別源円旨（建仁寺44世）71歳で死去 玉岡如金（天瓊盤致集）、弘祥寺に住持（別源円旨の法嗣）	貞治 5年	斯波高経中央で失脚
貞治 6年 (1367)	幕府に背いて越前に逃げ下った斯波高経に味方する「千秋安居一門」が「安居白土岡」（一名捨端山）に城を築き 弘祥寺を攻撃しようとしたので朝倉高景、氏景がこの城を攻め落とした。	貞治 6年 応安5年 (1372) 至徳3年 (1386) 応永元年 (1394) 応永3年	斯波高経袖山城で病死 2月朝倉氏景白土城を急襲し、千秋安居一門を討ち取った。白土城は捨端山城ともいわれた。 12月 足利義詮死去 朝倉高景（2代）死去（59歳） 建仁寺 京都五山の第3位の官刹 京都相国寺、直歲寮の失火で焼失 建仁寺焼失 相国寺再建
応永 8年 (1401)	朝倉高景の子氏景弘祥寺の大仏殿を建立 *この時に釈迦如来と脇侍が寄進されたのかも知れない。	応永11年 (1404)	朝倉氏景（3代）死去（66歳）
応永19年 (1412)	11月25日弘祥寺の寺格を「十刹」に列す。	応永25年 (1418) 応永32年 (1425) 正長元年 (1428) 永享8年	相国寺またもや火災に遭う 仏殿、法堂、僧堂、山門、など復興事業は足利義持、義教の2代にわたる。 朝倉高景（一乗谷初代）生まれる 朝倉貞景（4代）死去
永享8年間 (1436)	5月16日 圣貞首座（座）弘祥寺に住持		
永享10年	3月18日 契成大詔（けいじゅだいじょう） (越智集)（座）京軒日録、弘祥寺に住持		
嘉吉 2年 (1442)	朝倉氏景の孫、教景弘祥寺の仏殿を再興		
年代不明	藍 脊岩（心田清福集）、弘祥寺に住持	宝徳元年 (1449)	朝倉氏景（一乗谷2代）生まれる

弘祥寺関係		その他の時代背景	
年号	出来事	年号	出来事
長禄 2年 (1458)	住職の心浩西堂が京都相国寺に入る。	宝徳2年 (1450)	朝倉家景死去(49歳)
寛正 2年 (1461)	5月15日 鷹瑞(鷹涼軒日録)、弘祥寺に住持	長禄 2年 (1458)	達仁寺1000余貫文の費用を使って再建が進められる。
寛正 4年 (1463)	住職の錦溪如辰西堂が京都相国寺に入る	寛正4年 (1463)	朝倉教景(5代)死去(84歳)
延徳 元年 (1489)	住職の契壇西堂が京都相国寺に入る。	応仁 元年 (1467)	応仁の乱が始まる。 相国寺戦火に遭う
明応 2年 (1493)	4月16日 春岳契東(鷹涼軒日録)、弘祥寺に住持	文明 3年 (1471)	朝倉孝景越前守護となり黒丸城から一乗谷に移る。
明応 6年	4月3日 珍慶菴主(大乗院寺社雜事記)、弘祥寺に住持	文明 7年	蓮如上人吉崎に道場を建立する。 蓮如8月下旬吉崎を退去
文亀 3年 (1503)	12月28日叔華西雲(任生本朝倉計図)、大功(初代氏景)の百年忌に拈香(ねんこう)。	文明10年	10月 相国寺仏殿、法堂を再建
永正 元年 (1504)	朝倉貞景の招きにより月舟寿桂(幻雲)が達仁寺より弘祥寺に来る。	文明18年 (1486)	朝倉氏景死去。貞景14歳で国主
永正 6年 (1509) (1510)	6月 月舟寿桂、朝倉貞景の命で弘祥寺に入寺(2年間)	長享 元年 (1487)	月舟寿桂初めて越前へ下向。
永正 8年	月舟寿桂達仁寺に入寺 功甫洞丹(幻雲疏稿)、弘祥寺に住持	永正元年	弘祥寺や今立の善心寺などに住み移った。
永正10年	7月 朝倉孝景(4代)は弘祥寺の堂頭和尚を請じて導師とし、月舟寿桂が英林(初代孝景)の33年忌の陞座を行う。	永正 5年	貞景死去、朝倉孝景16歳で国主となる。
		永正15年 (1518)	朝倉孝景の招きにより月舟寿桂が達仁寺より再び来る。 7月に孝景の私宅にて含藏寺の堂上和尚を導師として、月舟寿桂が子春(氏景)の33

弘祥寺関係		その他の時代背景	
年号	出来事	年号	出来事
永正16年 (1519)	3月 宝玉(恵宝)「幻雲疏稿」、弘祥寺に住持	永正年中	年忌に陞座を行い、香語を読み上げる相国寺の寺観が旧に復した。
永正17年	5月 月舟寿桂が桂室永昌(孝景室)7年忌に陞座を行う。	天文 2年 (1533)	月舟寿桂(幻雲)が建仁寺246世として死去する。 *この頃に安居城には朝倉の一族朝倉孫三郎景健が居城していたと思われる。
享禄 5年	7月 洞仙雲巣「絶川家文書」、弘祥寺に住持		
	驥留鷹嗣(りよせつようは)、弘祥寺に住持する。弘祥寺及び今立の善志寺の両住持に就任していた。		
天文10年 (1541)	8月27日 駕留鷹嗣 建仁寺に入寺	天文11年	玉峰永末が生まれる
		天文13年 (1544)	駕留鷹嗣は3月に天沢(3代貞景)33年忌の陞座説法を行った。 貞景の4男景紀が宝応寺で行った
		天文17年 (1548)	朝倉孝景死去、義景16歳で越前守護
		天文19年	駕留鷹嗣は3月に大袖(孝景)3年忌の陞座説法を行う。
天文20年 (1551)	弘祥寺の丹東堂和尚の拈香により広景の200年忌が朝倉義景によって挙行される。	天文21年 (1552)	11月13日 建仁寺兵火により火災に遭う本尊も焼失した可能性が高い。
天文22年～ 永禄12年	(1556)～(1569)の間に、永源庵の玉峰永末が弘祥寺から京都建仁寺へ釈迦如来像、両脇侍像合計3体を請來した。	天文23年	駕留鷹嗣、大袖(孝景)の7年忌の陞座説法を行う。
永禄 5年 (1560)	7月19日 雪窓東堂「任生本朝倉計図」、心月(教景)の100年忌に拈香。	永禄 元年 (1555)	朝倉義景 加賀一向一揆と和睦 3月 駕留鷹嗣 建仁寺279世として死去
		安土桃山時代	
		天正 元年 (1573)	朝倉義景、織田信長と戦って8月14日近江刀根坂で破れ一乗谷に帰り、大野六坊賀松寺で8月20日自刃。一乗谷は8月18日放火され3日3晩燃え続けた。
天正 2年	一揆(倍長軍の焼き討ちか?)により本尊を残し、諸堂焼失する。 *その後の弘祥寺、村人は薬師如来を草堂に安置し、氏神同様に祀った。度々薬師如来を盗み出す者が絶えなかつたが、到る所にて盤験があるので持ち去った者から色々な申し開きをして村方に返してきた。	天正 2年	信長、守護代前波吉継を一乗谷に置く。 2月 越前国内に一向一揆が蜂起する。 府中城主 富田長秀、一乗谷を攻め前波吉継を滅ぼし、後に一揆にうたれる。
		天正 3年	8月 織田信長、一揆平定の為、越前に入国

弘祥寺関係		その他の時代背景	
年号	出来事	年号	出来事
天正 5年 (1577)	この話を聞き 越前国主 柴田勝家公より禁制札を賜る。	天正 10年 (1582)	6月 織田信長、本能寺で死去 弘祥寺から達仁寺へ釈迦如来を請來した 玉峰永宋死去
天正 11年 (1583)	越前国主 丹波長秀公より禁制札をたまわる。	天正 14年 (1586)	達仁寺、豊臣秀吉の援助を受け復興。
		慶長 初年 (1596)	戸田武蔵守勝成安居城に居城
		慶長 5年 (1599)	9月戸田武蔵守勝成 関ヶ原合戦で西軍に属し討ち死にして絶命。安居城もこの時廃城。
		慶長 6年 (1601)	徳川家康の二男 結城秀康が68万石をあたえられ越前に着任。直ちに北の庄城の建設に着手、11年を要して完成。工事は難航し、庶民に大きな負担となる。
		慶長 18年 (1613)	大阪冬の陣が起ころ
		元和 9年 (1623)	松平忠直 豊御に流される。
寛文年中	長光院 御心願事あって弘祥寺へ御祈念したところ、幕応速やかなことに感心し、大変喜ばれて光道公に弘祥寺の再興をお願いする。		
寛文 4年 (1664)	越前4代藩主 松平光道公により弘祥寺が再建される。 光道公のお局（長光院）が薬師如来の盤駒に帰依し進宮する臨済宗妙心寺派の大安寺住職 黙印和尚が兼帶する。 屋敷3石を賜る。		
寛文 6年	お局（長光院）の墓が建立される。		
寛文 9年 (1669)	弘祥寺が文明状により臨済宗妙心寺派に属す。この時臨済宗妙心寺末となり、寺地、山林など3石余り与えられた。	寛文 9年	福井城下の大火
寛文13年 (1673)	藩主松平光道公より、寺領20石が寄進される。	寛文11年 (1671)	松平光道公夫人（国姫）自殺。重大な夫への不遇があったみたいで、教養の差、性格の不一致等々
延宝 3年 (1676)	藩主松平昌親公より、屋敷分3石の外、寺領20石の朱印を賜る。（下村内高20石）	延宝 2年 (1675)	藩主松平光道公 自刃（39歳）
延宝 5年 (1677)	藩主松平綱昌公より、屋敷分3石の外、寺領20石の朱印を賜る。（下村内高20石）境内山林竹木諸役等免除	延宝 5年 (1677)	冬 達仁寺の釈迦如来、阿難尊者、迦葉尊者（元越前弘祥寺から請來された仏像）の3体が修理される。
		貞享 3年 (1686)	福井藩最大の危機、養父子の骨肉の争い、前藩主の昌親は万事が思いのままにならぬ為、藩主綱昌を乱心であると幕府に訴えたため

弘祥寺関係		その他の時代背景	
年号	出来事	年号	出来事
元禄 7年 (1694)	本尊を釈迦如来とし、薬師如来は薬師堂に移す。	享保 6年 (1721)	幕法により所領を奪われた。藩主綱昌の収入は47万5千石から25万石に減少した。 そのため家臣の転職を求め、残った者には収入を5割引にした。
宝曆 5年 (1756)	弘祥寺20石と申しても収穫物は一粒も無し、非常に困窮し 庫裏も大破、その後 梅嶺住職の初住の頃、本堂も大破に 及び、庫裏も無くなり日常住む所も難しく、棟家も無く、 自力で修復することも出来ない状況になる。	明和 2年 (1765) 明和年間 (1764~ 1771)	分家松岡藩主松平宗昌(5万石)が本家を 相続して福井藩は30万石になった。
享和 元年 (1801) と3年	役所のお尋ねにより「大治山弘祥寺記」を作り届け出る。	文化 9年 (1812)	達仁寺の現在の法堂が上棟される。(仏殿兼用 で拈華堂) 足羽川と日野川の合流点である漆ヶ瀬は禁猟 区になっていた。好猟場で藩主川遊びの恰好 の地であった。御座船六条丸に乗った歴代藩 主はしばしばここに来遊していた。
文政 6年 (1823)	眼道住職が弘祥寺に住持	橋 善覧	が生まれる。
文政13年 (1830)	眼道住職及び棟家一同、弘祥寺の寺中の状況を弘祥寺由来書 の覚えに記している。 *薬師堂、鐘楼は大破 薬師如来像は本堂に移す。	嘉永 5年 (1852) 慶応 4年 (1868)	橋善覧がこの頃に弘祥寺を訪れている。 松平慶永(春嶽) 漆ヶ瀬等で遊漁する。
明治 元年	神仏判然令が出る(神仏分離の令)	橋 善覧 死去	
明治 5年 (1872)	明治維新により、弘祥寺の祿高を返還する。		
明治 6年	飯塚の上田家より本山妙心寺管長に書を送る。「棟家なく寺 の維持が困難であること」を		
明治 8年	飯塚の上田家が土地を弘祥寺に寄付する。		
明治11年 (1878)	太治耕雲住職から壇主 上田治良吉殿に「弘祥寺の山林が 取り上げになり、この先如何したらよいものか心痛である 旨と寄付のお願い書」を出している。	明治11年	明治天皇北陸御巡行
明治12年	6月 太治耕雲住職から金銭の願い書 が出る。 8月 太治耕雲 死去 10月 菩提寺住職の立花毅道が弘祥寺住職を兼帶。 寺院目録(台帳)を石川県に上申する。		

弘祥寺関係		その他の時代背景	
年号	出来事	年号	出来事
明治15年 (1882)	木水融真住職が弘祥寺進退入の上田家に「誓約書」を出す 住職目には木水融真を推挙したが、松家3軒では寺の維持は困難であると異議をとなえられた。 弘祥寺を廢寺とし、大安寺に併合するよう本山妙心寺から指示される。	明治19年 (1886)	北陸線開通大土呂駅開始
明治30年 (1897)	大安寺住職の松山元定「古寺調査」「什物帳」を作る。 春日仏師作 厄子入り木造薬師如来像、国守制札、藩主朱印や本堂の絵図面が添付されている。	明治22年 (1889)	足羽川大洪水 各用水、取水口全部流出
明治31年	飯塚の上田家が村長に弘祥寺の土地の「寄付地所證明願」を願い出る。 村長証明する。	明治44年 (1911)	大渡、小渡村は河川改修によって、河川敷となるので、角折、金屋、福井などへ移籍して両区は消滅した。渡し船に代わって二光橋と小渡橋（大正3年廃橋）の両橋が架せられた
明治45年 (1912)	7月5日大安寺住職の松山義林が弘祥寺物品を受領する。 文書、掛け軸が主で、仏像、土地の状況はわからない。 仏像、土地が売却されているのかも知れない。		

昔、弘祥寺と言う大きな寺があった。古老からの言い伝えが耳を通り抜けていった。この話を何とか地区のみんなに目に見える形で表現しようと言う試みから、地区民が自らそれぞれ持っている力と知恵を結集してビデオ制作に取組みました。

ビデオ制作に先がけ、シナリオ作成までに資料収集などの作業を経て、出来上がった原稿は28分のビデオテープには表現仕切れない内容となりました。人形を使ったビデオ制作の発想が、関係者の中から生まれ、その人形作りの作業、人形の小道具、衣装の形など、様々なところで関係者の大変なご苦労を頂き、深く感謝申し上げます。

又、背景などに使用する写真撮影やビデオ録画など、地区内外はもとより県外までも、時間を構わず出向いていただいたスタッフの皆さんにも心から御礼を申し上げます。

こういった地区民の結集で出来上がった弘祥寺物語を、これから将来、東安居の目に見える歴史として継承する事と、ビデオの中で細かな部分の表現が出来なかった事柄を知っていただく為に、この冊子を発行する事となりました。

いにしえの風を呼ぶ 「弘祥寺物語」

2002年 8月 第一回 発行

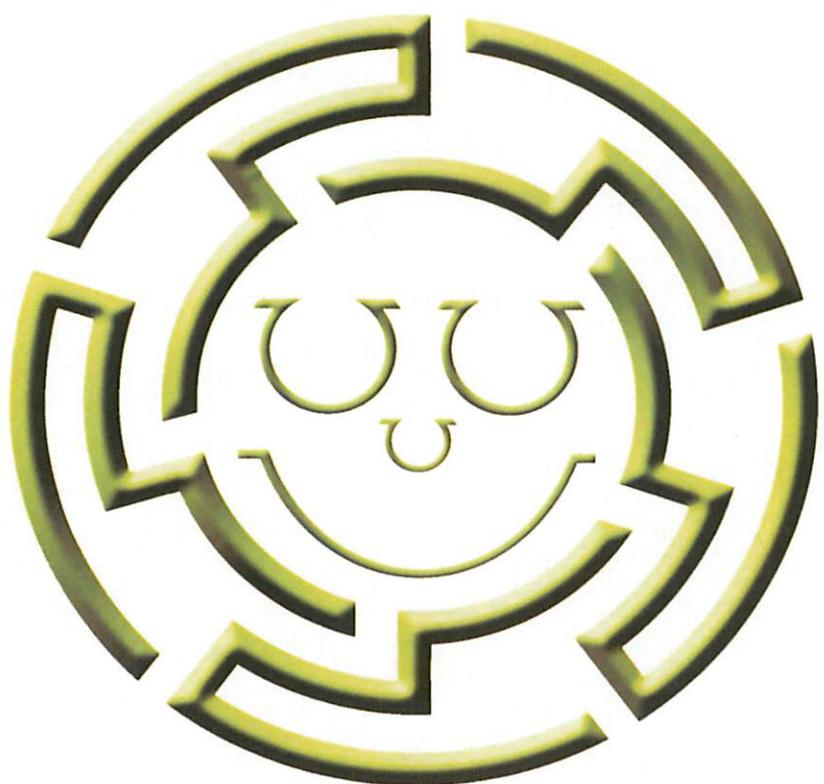
2011年11月 第二回 発行

2018年 3月 第三回 発行

発行者 菜の花公夢典東安居委員会

所在地 福井市飯塚町6-18

東安居公民館内



東安居マーク